緋弾のアリア　～最強のフツメン男～

タピオカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　～最強のフツメン男～

【Ｎコード】
Ｎ６４５０Ｘ

【作者名】
タピオカ

【あらすじ】
東京武偵高校の始業式、その日に彼は現れた……。
漆黒の外套に身を包んだその男こそ、世界最強クラスと詠われる武偵達と肩を並べ、武偵ランク《Ｒ》、即ち八人目の『Ｒｏｙａｌ』に名を連ねた最強無敵の銃使い。
名を小波トウジ！後に『撃鉄』の名で呼ばれる男！！

……しかし、確かに最強なのだが……彼の顔はブサ（ｒｙ…

…いや、あまりイケてない面だった！！

二人の戦争

「……」

血と硝煙の臭いが鼻に付く。

いつになってもこの二つが揃った臭いは嫌いだ。あの時を思い出しちまう。

俺と対峙する奴は、深紅に染まった妖刀を肩に担ぐように持ち、ニヤリと笑った。

「クッ、ククククッ……なあトウジ、懐かしくないか？」

「……」

どうやら、あいつも同意見らしい。しかし俺にとってはあの二年前の惨劇は懐かしいなんてもんじゃねえ。俺はあの時の光景を、あれから何度も夢見てるんだぜ？。

流石に毎日じゃないが、殺し合いの後なんて必ずあの時の夢を見る。起きた時にはガキみたいに泣きじゃくって、吐き気を催す。

「俺はあれから二年待った。俺が、お前を、この手で、……誰にも邪魔されずに殺せるこの時(いま)を……待ってた！！」

「……ああ、俺も待っていたよ。――――、てめぇは俺の手で直接殺す。『武偵殺し』なんて役目は関係ない。お前は、お前だけは誰にも殺らせない」

手にした自動拳銃（オートマチック）と回転式連続拳銃（リボルバー）の銃口を奴に向け、俺は構えた。

「クッ……あぁ…俺が女だったら今の一言で、惚れてたな」

「真顔で気持ち悪（わり）い事言うなっての、――――。……」

「ただの例え話じゃないかトウジ。……さて、……じゃあそろそろ殺し合おうじゃないか」

奴はそう言って、刀の切っ先を下ろした。

「……――――。本気、なんだな？」

一拍の間をおいて、最後の確認をする。まだ、あの時の俺達に戻れるかも知れないと……あるはずのない未来を求めて。

「今更だな、トウジ。二年前から、……いや、お前と会ったあの時から、俺はお前と殺し合いたいと願っていた」

シャッ……――――カチャッ。

そして、刀を鞘に納刀(のうとう)した。

全身の毛穴から汗が噴き出すのが理解出来た。
あれは奴の必殺の構え、居合いと呼ばれる型の初動！左手で、納刀状態の鞘を持ち、ゆっくりゆっくりと身体を捻る。そして、開いた手を刀の柄に近づける……。

奴が使う技で唯一名を付けられた天下御免(かいひふのう)の必殺技。

名を『七天衝(しちてんしょう)』

抜刀の初撃で横凪ぎの払いを放ち。加速した刀、それを返し刃で二撃目を与える。返し刃をまた返しそしてそれをまた返し、……計七撃。それを刹那(ときのかべ)の時を凌駕して、『全く同時に放つ』と言う反則技。

奴にしか、奴だけが使えることを天から赦された七つの『剣撃』。
天才を越えた鬼才をもってしても届かぬ剣の頂点(いただき)。

それを奴は使うのだ。冷や汗などまだ軽い。
あいつの技を知ってる奴が俺の他にいたらそいつが失禁してるほど

だ。

それほどまでにも、奴の抜刀術は死を理解(れんそう)させる。
今まさに俺は死を覚悟した。

奴の太刀筋はわかる。何処に来るかもわかる。だがしかし、光を越えた七つの連撃を、誰が避けられようか。

盾で防げ？御生僧様(おあいにくさま)、俺はそんなもん持ってないし、奴の太刀筋は全てが全て斬鉄の域だ。まぁ、盾ではないが防ぐ術はある。
しかし、防げるのは七つの内一撃だけだ。それ以外は諸(もろ)に受ける。

「……そうか、なら……もう話す事はないか」

「ああ、ないな……」

静寂。今ここにいるのは俺と奴のみ。それ以外の介入者は存在しない。
二人の決闘者は、互いに最強。結末は二者択一。

どちらかの死、あるのみ。

「……抜けよトウジ、どっちが速いか試してみようぜ」

「剣士が銃使いにそれを言うかよ。……たく、無理矢理にでも勝たなきゃいけなくなったじゃねぇか」

苦笑を漏らしつつ、俺は両手に持った自動拳銃をインナーホルスターに、回転式連続拳銃をヒップホルスターへ仕舞う。

奴に対抗する技は一つだけ。同質にしてまた異質。

それ以外の、他の可能性などない。共に生きる道はない。考えるな、他のことなど、考えるな。『敵』は容赦なく俺の首を刈りにくるのだ。手心を加えた瞬間、俺は死ぬ。他ならぬあいつに、殺されて！

故に、殺意を向けろ、敵意を磨け！求むる結末はただ一つ。鋼の心を持て！。

我が専心は、奴の滅殺にのみ向けられる――――――ッッ！！

「……いざ、参る……てなッ！」

この俺の言葉を最後にして、俺達二人の、二度目にして最後の死闘が始まった。

……――――――――しかし、その死闘……いや、戦争は、始まりと終わりと言う言葉を同義語ではないかと人を惑わせるほど速く、あっけなく終わる。

人が届かぬ境地。　人が届いてはいけない境地。

銃を極めた故の『銃撃』。

刀を極めた故の『剣撃』。

形は違えどその境地の先、彼ら二人が行きついた先は全く同じ、『人知を越えた殺戮兵器』と言う答えだ。

たった一人で一個師団の軍隊を『壊滅』させる力をもつ二人の衝突は正に戦争。

故に、この闘争は驚くほど速く終わる。あっけなく、終わる。

そう、二人は互いに必殺の一撃を放つのだ。

彼らの必殺とは軍隊が持つ殺戮兵器、『核兵器』とイコール(おなじ)だ。

互いの軍隊がそれぞれ核を放ったらどうなる？

……これは、そんな次元の話なのだ。

故にどちらもただではすまない。

どちらも、救われない。

そんな、救いのない、戦いなのだ。

黒衣の《R》

日本に帰って来た俺に課せられた最初の試練。それは外国と日本との時差だった。

そう、眠いのだ。羽田空港に着いた俺は瞼を擦りながら大きな欠伸をした。

約半日もの間飛行機に揺られ続けたせいか腰も痛い。いや～、ファーストクラスと言えどやはり座りっぱなしはよくねぇな。

荷物を受け取り空港のゲートを出た時、俺の胸ポケットがブブブブ、と低い音を立てて震動した。

「あ～、こちら小波（さざなみ）……――おぉ、姫さんか、久しぶりだな。んぁ？今ついた所だが？」

胸ポケットから取り出したケータイ電話の通話ボタンを電話に出る。

顔を会わせたのは三年前だが、電話越しにはこの三年で何度も会話した相手だった。

「確か始業式は8時半からだったっけか？ったく、面倒だぜ日本って所はよ。フランスじゃ堂々と遅刻出来て良かったんだが……わぁってるよ、王家さまの『品位』のためですもんね。ちくしょう、久しぶりの日本でゆっくりも出来ねぇなんてな」

俺は溜め息をつきながらもトランクを引きながら目的地へ向かう。

「あ？自分の家で？……おいおい、学生武偵に家なんてねぇの知ってんよな？それ知っててそんなこ――――……あ？俺は寮じゃねぇだと！？学生武偵は世界各国、寮制度だろうが！個人的には嬉しいがどうなんだよそれ……あ？ここを右？……ってなんでナビゲートしてんだよ、お前今オルレアンに……衛星使うなバカ野郎」

電話越しに言われたように十字路で右折する。
地図データ送れば済むのにいちいちナビしやがって、面倒臭いぜまったくよぉ。

十数分後、俺の目の前に建っていたのは二階建ての一軒家だった。
一階はシャッターが閉まっているがガレージらしく玄関は二階、レンガ造りの階段を上がる必要がある。

「無駄に広いな……まさか一人暮らしか？……だと思ったぜ」

ドアを開け、玄関に入った俺は中の広さに絶句した。

３ＬＤＫなのだ。

一人暮らしには辛い広さだ。

「まだ始業式まで時間があんな…銃の受け取りにでも……なん…だと？」

トランクの中から日用品を取り出しながら電話に出ていた俺は、電話越しの女の言葉を聞いて驚いたのだ。

ドタドタと音をたてながら室内を走り、一階へと続く室内階段を見つけ一階へ降りる。

真っ暗だったガレージの電灯スイッチを押した俺は盛大な溜め息をついた。……こりゃなんだ？俺んチはなんだ？武器屋か？

ガレージの壁にはところ狭しと様々な銃器が飾られていたのだ。なんか工具箱やらが置かれた銃鍛冶が使いそうな机もあるし……。

「確かに俺は武器庫だのなんだの言われてるがなぁ、自分の家まで武器庫にしたいとは思ってねぇぞコラ！…祝いだと？……祝いならなぁ…食いもんとかせめて俺が嬉しがるもんを寄越せよ！物騒過ぎるわボケぇッ！……い、いや…その、……まぁ嬉しくはあるがよ……あッてめぇ嘘泣きしやがったなぁッ！？」

電話越しの相手に怒鳴りつけながら俺の視線は、視界の隅に入った灰色のシートを掛けられた『何か』に釘付けになった。

「――こりゃなんだ？シートが掛けられたデカイ……これも銃とか言わねぇよな？……いや、これはまさか……ッ」

シートを翻すように引けば、そこにあるのは漆黒のボディの大型バイク。それは、パリにて作られているはずの俺専用のバイクだった。

「アーセナル…出来てたのか」

車体に多くの銃器を搭載しているそのバイクの名はアーセナル。

「……ああ、サンキュー、姫さん。そーだ、あいつらに礼言っといてくれよ。ん、……ああ、あんがとよ。……さて、じゃあそろそろ俺は行くぜ？早速使わせて貰うよ」

俺は電話を切り、壁に掛けてある銃の中から拳銃二挺をショルダーホルスター、ヒップホルスターに入れ二階へ上がる。

トランクの中から武偵高の制服のベストタイプを着込み、更にその上に真っ黒の外套（ロングコート）を羽織る。

再びガレージへと降りた俺は、ＭＰ５サブマシンガンを二挺、Ｍ１８９７ショットガン（通称トレンチガン）を一挺……その他マガジンや手榴弾を外套の内隠しポケットに突っ込み『アーセナル』に跨がる。

「さて、始業式と行きますか」

リモコンスイッチで閉じたシャッターを開け、俺はアーセナルを走らせた。

◇

「はっはっはっはーッ！ぶぅわぁーかっ！白バイ程度がこの俺とアーセナルに追い付けると思ってんのかよ！」

ちなみにこのアーセナル、最高速度４００ｋｍ／ｈ越えの化物バイクである。勿論今は３００ｋｍ／ｈ以下だ。

車と車の間をスルスルと抜けていき、白バイを撒いた俺は有頂天で高笑いしながら笑っていた。

「はっはっはっは……は？」

そんな時だった。

俺の視界に、パラグライダーに乗った少女が見えた。

グワァンッ！！

「今行くぜ！待っててよマイスイートハニーッ！！」

少女がパラグライダーを使ってる＝非日常＝イベント＝つまりは美女（でないと許さん）。

と言う素敵方程式が一瞬にして頭に浮かんだ俺は、下心丸出しの笑みを漏らしながらまだ見ぬ美女との出逢いのためアーセナルを少女に向け走らせた。

◇

そこで見たのはなんの冗談か、『セグウェイ』の人が乗るべき部分にスピーカーと一基の自動銃座が載っていると言う、もはやギャグとしか思えんものが七台、武偵高のグラウンドの体育倉庫へ銃口を向けていて、その先に武偵高の男子生徒が余裕そうな表情を浮かべていると言う非日常のヒトコマ。ちなみにその男子生徒はイケメンだった。イケメンは死ね。むしろ俺以外の野郎が死ねば世界中の美少女は俺の嫁になるんじゃね？。

ズガガガガガガンッ！！

七台のセグウェイは一斉に銃座に乗ったサブマシンガンを撃つ。

ありゃＩＭＩ社の短機関銃、ＵＺＩ（ウージー）じゃねぇか。

そして俺はそこで目を見開いた。

毎秒１０発の９パラ（パラベラム）弾を放つＵＺＩ、それも七台の掃射を、その野郎は不敵な笑みを見せて全て避けやがったのだ。

そして、拳銃……どうやらベレッタＭ９２Ｆの改造品だろうか…腕を横に凪ぎながらフルオートで応射し、七台のＵＺＩの各銃口に一発ずつ銃弾を叩き込むと言うなんとも曲芸じみた技でＵＺＩを吹き飛ばしたのだ。

「へぇ、Ｓ相当か？日本もまだまだ捨てたもんじゃねぇな……だがしかし、甘いな。俺だったらあと一基や二基、用意して隙を撃つ。ほれ、こんな感じに……」

俺はヒップホルスターから異形のリボルバー『マテバＭ２００６』の銃身を少し長くしたカスタムモデルを抜き取り、体育倉庫へその銃口を向けた。

「…なっ！」

ガゥンッ！

マテバから放たれた一発の３５７マグナム弾は体育倉庫の陰からスカしたイケメン野郎を狙っていた、『八台目』のセグウェイを撃ち抜き、小爆発を起こす。

「美少女はいなかったが、なかなか面白い物が見れたぜ。……ん、流石に気付くか」

見ればイケメン野郎がこちらに気づいたらしく、視線を俺に向け、銃を構えて警戒していた。

しかしイケメン野郎がいる体育倉庫とはそれこそ『数百メートル』以上離れてる。話しかけるには声を出さなけりゃならんし、そもそもイケメン野郎相手に話す事もねえ。

俺は軽く手を振ってその場を去る事に決めた。

面倒事はごめんだからな。

◇

「風穴開けるわよ！」

俺が所属する事になった2年A組、その教室のドアを開けて聞いた言葉である。

「どうしてこうなった」

「では続いて、アリアさんと同じく紹介をさせて貰います。どうぞ～」

「あー、……俺は小波（さざなみ）トウジ。よろしく」

酷く気の抜けた自己紹介だが許して欲しい。今俺はとても憂鬱なのだ。

俺の名前は小波トウジ。（こなみと読むなよ？）中等部を卒業してすぐパリへと交換留学生として留学していた俺は、本来紹介する必要もないのに紹介しなければならなかったからだ。

しかも、俺が自己紹介すれば何故か十人中十人が残念がり、首を傾げる。

もちろん、首を傾げる理由はこの服装だ。しかし、残念がる理由……その理由のせいで俺は憂鬱なのだ。

「……不細工」

「ビミョー…」

「顔が……残念」

2年A組女子一同の言葉である。ちくせう。

しかもさっき風穴がどうとか言ってた美少女の後のせいなのもあるだろう。

あれだ、旨いもんを食った後に不味いもん食うと不味さが引き立つようなアレだ。

そう、はっきり言うと俺はあんまりイケてない面なのだ。
コンプレックスと言っても良い。俺はイケてない面なのだ。
女の子達の失望の言葉が俺の硝子（グラスハート）の心を粉々にしてゆく……。

「あーーッ！お前は今朝のバイク野郎！」

俺が心の痛みに耐える最中、突然ガタッ、と立ち上がり俺を指差す野郎が一人。

「あ？……お前は…今朝の曲芸野郎か。んだコラ、Ｓランクごときが俺に喧嘩振る気か？イケメン野郎は問答無用で殺しに行くぞ？」

俺がイライラしてるのを知ってか知らずか、野郎は続ける。

「今朝のあれはお前の仕業か！？」

……？

「……は？今朝のあれって……セグウェイか？」

「そうだ！お前のせいでチャリはぶっ壊れるはこいつに追われるは散々だったんだぞ！？」

「あ？……助けてやったのに良いご身分だな。しかも俺はやってねえ。今朝の便で俺は日本に来たんだぞ？さらにさらに、たかたがかＳ級一人殺るのにあんなくだらねぇ真似なんかしねぇ。これで充分だ」

俺がショルダーホルスターから拳銃…ベレッタＭ９２Ｆを元に『造られた』オリジナルのカスタム銃、『ヴィレッタ・ムラマサブレイド』を抜き取り銃口をイケメン野郎へ向ける。

「ッ！……」

するとイケメンは咄嗟にショルダーホルスターに掛けてある銃に手を伸ばし、……――――そこで止まった。

「なーんてな！あっはっはっはっ！んなビビんなって！武偵憲章にもあるだろ？本来武偵ってのは人を殺さない。あれはマジで人違いだ、俺じゃねぇ」

俺が殺気を納めたからだ。

「いやぁマジでビビってやんの。流石にSランクでもRランクの覇気にゃ耐えられなかったか？…あっはっはっはっ！」

「「「「……は？」」」」

俺は適当に空いてる席に座った。クラス中の視線は俺が独占中。なんだよ、居心地わりぃな。

「あ、良い忘れてましたが……小波君は武偵ランク最高位のランク《R》です。皆さん仲良くしましょうね～」

どこか間延びした担任の言葉でクラスは阿鼻叫喚の渦へと叩き込まれた。

「「「「「えええええぇぇぇ〜〜ッ！！？」」」」」

そう、何を隠そうこの小波トウジ、世界最強クラスと詠われる武偵ランク《R》なのだ。

黒衣の《R》（後書き）

書いてしまった……。

カレンデュラの次話も終わってないのに……ハマってしまった！！（笑）

……いやぁ、面白い。面白いです緋弾のアリア。
何が面白いって戦闘がギャグと化してるのが面白い（笑）
そしてヒス・アゴモードの金一かっけぇ（笑）

そんなこんなでオリキャラを考えているうちに、「アレ？これいけんじゃね？」と思ったのが最後。書いてました（笑）

まだどの小説も完結してないのに手を出したりして、あきれられるとは思いますが、妄想が止まらんのです（笑）

これまた更新不定期ですがよろしくお願いします。

スタイリッシュサボり

「へぇ、じゃああれだ。今世間様を騒がしてる……そのなんとかって奴の模倣犯に、キンジは狙われてたわけだ」

「武偵殺し、な。たく、ほんと厄日だよ今日は」

「……武偵殺し…ね」

「？」

「まぁ、なんだ。災難だったな」

はぁ、と大きく溜め息をついたキンジの肩を軽く叩いてやる。なんつーか、可哀想な奴だなコイツ。イケメンでなければ良かったのに。

こいつの名前は遠山キンジ。自己紹介の際に俺にバイク野郎と言ったこのイケメン野郎の名前だ。

俺が体育倉庫でキンジを見る少し前に、バイクのサドルにプラスチック爆弾を込められ、そこを風穴がどうとか言ってた美少女、アリアに助けられたらしい。もげろ。

しかし俺はロリコンではない。美少女だからってロリはダメだ。俺は女の子にはおっきな胸がないといやなのだ。ＮＯペチャパイ！

今は昼休み。俺とキンジの二人はクラス中からの質問責めを逃げ、校舎の屋上にいたのだ。

◇

屋上に来てから五分とせず、俺とキンジは名前で呼び会う中になった。良い奴なんだがイケメンじゃなけりゃなぁ……

「にしてもトウジ」

「ん？」

そのキンジが頬を掻きながら聞いてきた。

「……ほんとに《R》なのか？」

「喧嘩売ってんのかキンジ？」

「いやいや、Sランク武偵でさえ珍しいんだ、それこそRランク武偵なんて身近に感じられないような奴ばっかりなのかなって思っててさ。話してみたら武偵の例に漏れず多少ネジぶっ飛んでるけど、悪い奴じゃないってわかったからな」

キンジの言い分は確かに頷ける。Rランク武偵とは『世界で八人』

しかいない最強の武偵達。世界各国に存在する武偵達の頂点に『君臨』するのだ。
そんな奴と級友になる、なんて言われても実感が沸かんだろうな。
「まあ俺は別もんっつーか……一応一般市民からの出だからな～。……つーかネジぶっ飛んでるってどういう意味だコラ」
「そのまんまの意味だ」
「お前殺す。ぜってー殺す」
「武偵法９条」
「うるせぇ」
俺はゴツ、と軽くキンジを蹴るのだった。

「大体よぉキンジ、てめぇだってネジ数本ぶっ飛んでるだろうが」
「なっ…！……俺のどこがおかしいんだよ」
「ＵＺＩの銃口をフルオートのベレッタで狙い撃ってぶっ壊すなんて普通考えねぇよ。普通なら足壊して終わりだろ？」
そんな風に言い返すと、キンジは苦虫を数十匹纏めて噛み潰したように顔をしかめ、大きく溜め息をついた。

「いや、あ、あれは……その」

「まあS程度なら普通なんだろうな。俺はそんな余分……余分でもねぇな……なんつーか、簡単に済む方を選びがちなんだよ。知り合いに言われたんだが面倒臭がり屋らしいからな、俺は」

そしてまた、口ごもった。

「俺はその、……Eランク武偵なんだ」

「……嘘こけ」

「い、いや！本当に俺は武偵ランクEなんだって！しかも俺はこんなイカれた学校、速く抜けて普通の学校に行きたいんだ！」

……この驚きようを諸君らにどうやって伝えられよう。

武偵ランク、それは簡単に言うと、武偵と言われる犯罪者の逮捕権限を持つ傭兵の強さ、または凄さ早見表のようなものだ。

最低ランクEから始まりランクSまでの六段階あり、ランクEは一般市民に毛が生えた程度。ランクSは世界各国から必要とされるほどの超エリート。その道のプロと呼ばれるAランク武偵が束になっても敵わないという超越者。

……と言った具合だ。まぁあれだ、ランクが上の奴と下のランクの

奴との差は、下のランクを軽くあしらえる程度、と言われてる。

ん？ランク《R》？……勿論、武偵ランク《R》の俺は、Sランク武偵程度なら束になって掛かって来ても殺られないだけの能力を持つ。そう、Rランク武偵なんつー奴等の仲間入りするなら、人間を辞めにゃならん。そう思えば、確かにキンジの言う通り。俺は『人間』としてのネジがぶっ飛んでるんだろうが……――――そんな人間辞めた奴等、Rランク武偵に人間の域にいるSランク武偵が勝てるはずもなく、S以下なんて話にならん。一国が出来るくらい人数をかき集めたところで俺を殺すことは出来ない。

ただ、壊滅させるより俺の弾薬が尽きてしまう方が先だろうな。

……――――話がそれたな。

もう一度おさらいしようか。

キンジはEランクだと言っている。七つの銃口に各一発づつ弾丸を叩き込みサブマシンガンをぶっ壊すと言った達人技を見せたこいつが、『ランクE』だと？

「……ま、なんかあんだろうから深くは聞かんがよ、あのアリアちゃんにはバレてんだろ？……多分付き纏われるぞ？キンジ爆発しろ」

「だよなー…ってなん俺が爆発せにゃならんのだ」
キンジもそうだろうと思ってたらしく、大きな溜め息をついて腰をついた。

ブ、ブブブブ……――。

胸ポケットの携帯電話が振動する。
「お？……おぉ、忘れてた」
携帯電話の画面を見ればメールが一件。件名は……『お久さしぶりッス』。
「どうかしたのか？」
座ったキンジが俺を見上げながら問う。
「こっちにいる後輩からメール。銃の様子を見たいから来てくれ、らしい。一年も見せてなかったから大分ガタついてたしな、見せなきなゃと思ってたんだよ」
「へぇ、装備科の後輩か？」
「ああ、最高の銃鍛治だ。多少性格に難ありだがな」

そう言って俺は屋上の柵の上に飛び乗り、眼下を見下ろす。
昼休みだからか、多くの武偵高の生徒がいるのが見える。

「わっ！？トウジ、お前なにやってっ……――」

「キンジ、お前《R》だって疑ってたろ？…俺がRランク武偵だって証拠を見せてやる。あ、あと俺午後の授業フケっからよろしく」

そして、俺はスキップをするかのような軽い足取りで……――――落ちた。

◇

ここは校舎の屋上。四階建ての校舎の高さはけっこうある。人が落下すれば簡単に死ねる。そんな高さのある所からなんの用意もなく落ちて助かる人間なんていやしない。

だから、……平然と着地し、軽い敬礼のような事をしてカッコつけ、黒い上着を靡かせながら授業をサボったあのバカは……人間を辞めてるような奴だってことがよくわかった。

「マジで…なんともないのか…？」

俺は戦慄していた。あれがRランク武偵……どんだけ出鱈目な奴なんだ。

（そう言や…なんだったんだ？）

俺は先ほどのトウジとの会話を思い出した。

武偵殺しの名前を言った時、アイツはなんと言うか…無表情になった。　全く感情を感じさせない、そんな無表情だったが……アイツの無表情は怖い、と思ってしまった。

「……気のせいか？」

そう言って、俺こと遠山キンジは、この屋上に上がってくるだろう女子生徒の話し声を聞き、咄嗟に出入口の陰にそそくさと隠れたのだった。

◇

装備科（アムド）専門棟の一室、開けっ放しの部屋のドアを軽くノックする。

「よっ、ミハエラ。丸一年ぶりだな」

「先輩っ！？お、お久ぶりッス！」

そこにいたのは大きさの合わない瓶底眼鏡を掛けた金髪の少女。

名前はミハエラ。名字とかはないが、他の武偵連中からはミハエラ・カラシニコフなんて呼ばれてる。

名前が、かの傑作アサルトライフルＡＫ－４７を産み出したミハエル・カラシニコフに似ていることと、銃……いや、兵器の設計に関して類い稀な才を持つからだろう。

俺の『ヴィレッタ・ムラマサブレイド』も、ミハエラがベレッタＰ９２Ｆを元に、一から設計し直したオリジナルの銃だ。外見こそベレッタのバレルが少し長くなっただけのような姿だが、中身は全くの別物だ。

例をあげるなら……そうだな、もちろん違法なのだが『強装弾』を連続で使い続けても全く壊れない、と言った破格振り。

少々重いのが難点だが、それ以外は拳銃でありながら拳銃の域を越えたスペックを持つ怪物銃だ。

「おう。元気そうだかミハエラ。早速だけど頼めるか？」

「御安い御用ッス！」

俺が弾薬を抜いた二挺の拳銃をミハエラに渡すと、ミハエラは瓶底眼鏡の位置を直し、作業へと没頭する。
彼女が銃の事に没頭すると、集中し過ぎて３０分は話しかけても何も答えない（ミハエラからは聞こえな）ようになるので、俺は近くにあった椅子に腰掛け、銃鍛治の診断結果を待つ間短い眠りにつくことにした。

３０分も寝れれば眠気も覚めるだろう。

そう、俺はまだ日本に来てから一睡眠もしてなかったのだ。

スタイリッシュサボり（後書き）

Rランク武偵とSランク武偵の簡単見分けかた～

Sランク武偵：

達人技を使ったりして凄いけど、最後の一線で人間。
達人技でも、まだカッコいい！とか思えたり出来るレベル。

Rランク武偵（特にトウジ）：

超偵でもないのに物理法則を無視し始める。
物凄い怪物と一対一でやり合っても圧勝出来る。
人としてどっか軸がぶれてる。と言うより色々人間やめてる。

カッコいい！と思われるより、凄すぎてドン引きされるレベル。

こんな感じですね。ちなみに、武偵ランクをつけるなら問答無用で《R》が付く教授。キンジ対教授戦で私が教授のチート加減に、私はドン引きしました（笑）

豪雨の中の追撃戦

「あ〝〜〜……だりぃ〜〜」

俺がキライな物は世界で三つある。

一つは、女の子にモテモテなイケメン。

二つは、　面倒なこと

そして三つ目は……雨だ。

ザーザーザーザーと降りしきる雨に俺のテンションはだだ下がり。

だって雨に濡れたら冷たいし、濡れるのが嫌だから傘使って片手塞がるし、何よりじめじめしてて嫌だし。

……俺の経験則だが、昔から雨の日はついてないのだ。

授業の一時間目がはじまっているであろう今も俺は、俺しかいないこのだだっ広い部屋のソファに寝っ転がりながら愚痴を漏らし続け

ていた。

そんな時だった。

ブ、ブブブブブブブブブ……――――。

突然、俺の携帯が振動する。

「……面倒臭ぇ…誰からだ？……」

携帯電話を開き、画面に表示されている文字を見て俺は小さく溜め息をついた。

「あー、もしもしどちら様？」

非通知だったのだ。

《私は神埼・Ｈ・アリアよ！アンタ小波トウジよね？今仕事出来る状態！？》

電話越しに聞こえたアニメ声は、キンジが言っていた件のＳランク武偵、神埼・Ｈ・アリアのがなり声だった。　神埼に電話番号を教えたつもりはなかったんだが……こいつ、事前に調べてやがったな？

「雨で気分が乗らん」

神埼の声から、切羽詰まっている状況だとわかるが、俺は雨が大嫌いなのだ。

《はぁっ！？今事件が起こってんのよ！？バ・ス・ジャック！！武偵高行きのバスに、爆弾が仕掛られてるの！C装備で女子寮の屋上に今すぐ来なさい！》

「面倒臭ぇ。俺にゃあ関係ない、頑張れ」

《なっ、なっ！、なな何言ってんのアンタ！武偵の！仲間の命が！かかってんのよっ！？》

……俺のテンションが段々下がって行くのと比例して、電話口の神埼のテンションが跳ね上がっていくのがわかる。

ああ、マジで面倒臭くなってきやがったぞ。

《武偵憲章1条！『仲間を信じ、仲間を助けよ！』……被害者は武偵高の仲間よ？わかったら速く来なさい！来なけりゃ風穴開けるわ

よ！？》

「……やる気が起きないんだよ」

その一言で、電話の向こうの神埼が切れた。

《ッ！？……アンタ…ねぇッ…ならもう良いわよ！私達だけで…ッ！》

《バカっ！待てアリア！……トウジ！俺だ、キンジだ！》

切れて電話を切ろうとしたらしいアリアを止めて、キンジが神埼の代わりに出だ。

《アリアの強引かつ一方的な言動は俺が謝る！だけど今は戦力が必要なんだ！……頼む、トウジ！》

「……」

別に神埼の言動に怒ったわけじゃない。本当に、ただ嫌なだけなのだ。

だが、面倒と言うだけで見捨てると言うのも『武偵』としては……いや、人として最悪だ。普段なら一も二もなく向かっていたのだが……本当に、雨の日はダメなのだ。ジンクス、とでも言えるだろう。嫌な想い出は雨の日ばかりだ。

俺の無言を拒否と受け取ったらしいキンジは、

《バスジャックの犯人は本物の『武偵殺し』らしいんだ。……頼む、トウジ！》

と言って来た。

◇

「バスジャックの犯人は本物の『武偵殺し』らしいんだ。……頼む、トウジ！」

降りしきる雨の中、アリアから奪った無線機の向こうのトウジを『刺激』する。

この前屋上で話した時、トウジは『武偵殺し』と言う単語を聞き、少しおかしくなった。

どこがどう、と言うものではなかったが……トウジが少なからず反応を示した単語（ワード）しかもう残りの手はない。　藁をもすがる勢いで、俺はトウジがこの単語に反応する事を祈った。

《武偵…殺し？》

反応した！！

「ああ、武偵殺しだ」

《……俺はバイクで向かう。神埼へ変われ、ナビが欲しい》

無線越しにトウジが用意をし始め、ガチャガチャという音が聞こえ始めた。

「ああ、わかった。……アリア、トウジはバイクで向かうらしい。ナビを頼むって」

不貞腐れたように頬を膨らませていたアリアへ、繋がったままの無線を渡す。

「ふん。アンタ、どういう心変わりなのよ！」

コラコラ、折角やる気になってくれたんだから刺激すんなっての！

「へ？……ふふん。わかればいいのよわかれば。ええ、こっちが補足しだい連絡するわ。それまでにアンタはポイント－73まで行っておいて。無線の周波数は……え？なんでわかんのよ。……まぁ良いわ」

そう言って無線を切ったアリアは、

「行くわよ、キンジ」

上空に現れたヘリを見上げながらそう言った。

……こいつ、こんなもん用意してたのかよ。手際が早すぎるっつの。

◇

「ちっ……たく、本当に雨の日は良いことがないぜ！」

防弾サングラスを掛け、インカムを付けた状態でアーセナルに乗っ

た俺はこの雨の中、３００ｋｍ／ｈ越えの速度で道路を走っていた。

「神埼、聞こえるか？ポイントまで後二分も掛からん。バスは見えたか？」

アーセナル。俺が使うこの大型バイクは、多数の重火器を登載するだけために作られたわけじゃない。

あらゆる悪路を走破し、内蔵された無線にて無線連絡も可能なハイテクバイクなのだ。

……パリの装備科（アムド）の奴等が嬉しそうに語ってたっけ。

俺の付けたインカムから延びたコードのプラグは、アーセナルの機器に繋がれており、神埼達が使ってるであろう無線の周波数に合わせて俺は問う。

《本当に来た！……今レキが見つけたわ……ホテル日航前を今右折したって！》

「あのホテルか……ん？……まさか…おいおい、……些か不味いぞ神埼、キンジ！」

俺は一年ほどフランスのパリ武偵高へ交換留学生として留学していた。しかし、それ以前はここ日本、それもこの武偵高に近い武偵大付属中学に在学していた。

一年のブランクはあるが、一年でそうそう町並みが変わるものか。俺は慣れ親しんだこの街の地図を頭の中で広げ、バスの本来の巡回路とバスの現在地を脳内で比較した。

《不味い？》

インカムからキンジの声が聞こえる。どうやらまだ理解には届いてないみたいだな。

「わからないか？……レキって奴、お前視力幾つだ？」

《左右、共に６．０です。》

「女の子！？……そうか、……レキちゃん、バスの行く先に……トンネルは見えないかい？」

《何声でレキが女だってわかった瞬間、露骨に声色変えてんのよ、この変態ブサイク》

「うるっせぇよ幼児体型！変態なのは良いがブサイクとは二度と言うんじゃねぇぞ！ちくせう！！目から熱い雨が溢れて来やがった！」

《……見えます》

《誰が幼児体型ですってぇッ！！？》

《少し黙れってのアリア！……トンネル…トンネルトンネル……東京湾トンネル……そうか、お台場か！？》

「ビンゴッ、だキンジ！」

３００ｋｍ／ｈで走りながらの思考は危ない。今もトラックにぶつかりかけた。

「お台場なんかで爆発されても事だ、東京湾トンネル前でヘリからバスへ飛び乗れるか神埼？」

《私を誰だと思ってんのよ、任せなさい！》

「良し……先の状況把握は任せた。俺もすぐに向かう！」

そう言って、俺はアーセナルのハンドルを回す。
エンジンが唸りを上げ、身体に当たる風と雨が強くなる。

「見えた！……――っておい、なんだありゃっ！！？……」

数分後、バスに乗ったと言うキンジと神埼の報告の後、視界の先に東京湾トンネルが見えたのだが……――

「トンネルが……氷の壁で塞がってやがる！」

俺は咄嗟にハンドルを切り、ドリフトをしながら横になった車体から分隊支援火器ＭＩＮＩＭＩを取り出す。

《氷！？》

「ああ、氷だよちくしょう！！」

ＭＩＮＩＭＩを片手で構え、氷の壁に向けぶっぱなす。

バババババババッッ！！…――――。

氷の壁は砕けながらも、かなり分厚いのか中々崩れない。ちくしょう、雨のせいもあるが、３００ｋｍ／ｈからのドリフトは簡単に止まらん。アーセナルはズシャアアァッ！！と音を立てて道路を滑って行く。

「武偵殺しはどうやら超偵らしいな、ｓｈｉｔ（クソが）！」

片手で機関銃を撃ちながら、空いているもう片手をコートの中に突っ込む。

握られてるのは二個の手榴弾。安全ピンを口で抜き、氷の壁に向け投擲する。

狙いは氷の壁の上と下。二ヶ所を破壊して一気に進む！

ドカアアァァンッッ！！

耳をつんざくような爆発は、見事氷の壁を粉砕しやがった。

「氷の壁を突破した。もう追い付けるぞ！」

ドリフト状態のアーセナルを立て直し、ハンドルを限界まで回す。

ぐにゃり

一瞬、視界が捻れまがる。常人を凌駕する五感を有する俺でさえ一瞬、感覚が可笑しくなる速度。

これがアーセナルの限界速度……おいおい、メーター４００を大きく上回ってんだが……ほんとにこいつの限界速度４００なんだよな！！？。

俺はちょっとビビりながらもトンネルに入る。エンジン音がトンネルに響いてうるせぇっ！

◇

トウジが氷の壁を砕いてトンネルへ入って行ったのを見届けた影が一つ……。

目元まで隠れるようなフードがついたコートを纏い、薄い板のような物を取り出して耳に当てた。

「ああ、……奴の足止めに失敗した。機関銃と手榴弾で突破して行った。……『銃撃のトウジ』……確かに、我らに仇なす者達の中では正に最強、と呼べるだろう。……厄介だな」

そしてそのフードを深く被ったそいつは、板のような物を懐へしまい踵を返し、雨の街へ消えていった。

豪雨の中の追撃戦（後書き）

今話を一言で言えば……アーセナル無双、ですな（笑）

仮面ライダーで言うならサイクロン号など、仮面ライダーの相棒役のバイク！やはりバイクに乗る男たちはカッコいいですね。

トウジはまぁ……アレですが（笑）

爆弾解体講座、無理矢理編

「うぉっ！？なんだ今のっ！今度はオープンカーの上に載せてんのか！？」

トンネル内を走っていれば、炎上してるオープンカーが目の前に迫り、そのオープンカーにＵＺＩが載っているのを見て思わず呆きれを通り越して驚いてしまう。

「たく、この『武偵殺し』さんは随分とシュールな事が好きなようだな……見えたっ」

目を細め、遠くに見えるバスを捉えた。そこには先ほど見たオープンカーと同じものが、ＵＺＩの射撃を食らったのか窓ガラスはすべからく割れてボロボロになったバスの側面に回り込み、バスの屋上にいたキンジと神埼の二人を狙おうとしてる所だった。

《アリア――アリアああっ！》

インカムからキンジの叫び声が流れる。どうやら、神埼に何か有ったようだ。

「キンジ！……クソッ、気付いてねぇのかよッ！！」

耳元から聞こえるキンジの声は明らかに取り乱してるのが分かる。

ＵＺＩの銃口が今まさに二人に向け銃弾を撃とうとするのが分かる。

「バカ野郎が……マテバで狙撃とかやらせんなよッ！！」

アーセナルに跨がったまま、ヒップホルスターのマテバＭ２００６を引き抜き、照準を一瞬で済ませ、俺はトリガーを引いた。

バンッ！バンッ！！――――

ギィンッ…ガガガガッ…ドカァァンッ！！

一発目はＵＺＩを、二発目はオープンカーを弾丸をで貫き、コントロールを失なったオープンカーはドンドンと音をたて、壁に激突し、火花を散らしながら擦り続けた後爆破炎上した。

「キンジ！キンジッ！！」

《！？……と、トウジかっ、アリアが！》

オープンカーの爆発と俺の声に、ようやく俺の存在に気付いたキンジが神埼を抱きかかえながら叫ぶ。

「死んじゃいねぇよ、心の臓腑は止まってねぇだろう？。弾丸も額をかすっただけみたいだな」

《ほ、本当か！？》

俺は常人より高い身体能力を持つ。現実に、物理的に。

特に視力に関しては5．0を越える。レキちゃんほどではないが、約十数メートル……この距離でなら神埼の髪の毛一本一本まで細かく見える。

「気絶してるのは脳震盪のせいだろう、バス内に入れて額の出血の応急処置をしろ！バスの中にゃ応急処置くらい出来る奴がいるばずだ」

《わかった！。トウジ、お前はどうするんだ！？》

どうやらキンジは俺の言葉にある程度冷静を取り戻したらしいな。

「あ？……俺か？……」

外套のポケットから、二つの黒い手袋を取り出し、それを両手にはめる。

工具は……あった。簡単なツールセットだったが外套の裏に着けておいてよかった。

「爆弾解体でもやろうかと、思ってる！爆弾は見つかったんだよな？」

「爆弾っ……車体の下だ、頼むトウジ！」

「あいよ！」

そう言って俺はインカムを投げ捨て、バイクから飛び降り、バスの後部の、ガラスが割れた窓枠に掴まる。そこからバスの車体下に滑り込むように入り、爆弾を探す。少しでも気を緩めれば道路に身体がぶつかってしまいそうだ。

俺がバスに飛び乗った事により制御を失ったアーセナルはグラグラとふらついた後にズシャァァッ！と音を立て横転した。

こと車体の頑丈さに関しては、アーセナルが設計図の状態から俺が常々装備科（アムド）の連中に口が酸っぱくなるくらい頑丈にしろと頼んでおいたため、ちょっとやそっとじゃ壊れないようになっている。転ばしても塗装が剥げる程度だろう、後で回収すればいい。

「トウジ！液体窒素はないんだろ！？」

「当然！爆弾解体、と言うよりはその周辺機器の解体だ！」

バスの中腹まで来た俺は外套の中から７つ道具を取り出す。

まずは爆弾を覆っている箱を取り外し、スピード制限のリミットを解除する。そうすれば停車することも可能になる。

カチャカチャカチャ…キィ…

「……ッ！……」

爆弾の覆いを取り外した俺は思わず絶句した。

「……こいつは…不味いぞ……」

俺が見たのは、スピード制限により起爆するようにした装置と、５：１１……５：１２…５：１３と、時間を刻む装置。

二つの起爆装置がついた、速度制限式、時限式の両方で起爆する『絶対不可避（オルタナティブ）な二者択一』。しかもどちらとも解除しなけりゃ起爆すると言う鬼仕様。

そして、たった２５０ｇで旅客機を破壊出来ると言うあの……

「『セムテックス』……マジで、洒落になんねぇぞ。」

それが約１８０ｇ、余裕でバスごと吹き飛ぶぜ。

「せめて速度制限式は外したいが……」

俺が７つ道具で解体を始めようとした時、屋上から発砲音が聞こえた。

パンッパンッ！

「キンジか！？何があった！！」

「クソッ…またあの―が来――った！それも六台も！」

バスの車体下にいるせいでキンジの言葉は飛び飛びにしか聞こえなかったが、大体わかった。

畜生、肝心な時にッ！

俺は７つ道具を外套内に仕舞い、おもむろに、手を離した。

「グッ…うッ！……」

手を離せば落ちるのは当然だ。バスから落下した俺は道路を転げ回る。ＵＺＩを載せた無人のオープンカーが迫るのを感じ、外套から

二挺の銃を取り出す。

ドパパパパパッ！

人体工学に基づいた異形のプルバックサブマシンガン、『Ｐ９０』だ。

ズシャァァッ！！

体勢を整え、野球のスライディングのような体勢で滑りながら二台のＵＺＩを破壊し、ＵＺＩの車線を避けるようにＵＺＩを載せたオープンカーに飛び乗り、ＵＺＩを引き抜いて車自体を破壊、ついで二台のオープンカーに向け掃射し破壊する。

これで五、残りは一。

ドパパパパパパパパパパパッ！！

二挺のＰ９０からばらまかれた弾丸に撃ち貫かれ、オープンカーが爆散する。

この間、五秒。俺は弾が尽きたＰ９０を捨てて、ＵＺＩだけを壊したオープンカーに飛び移ってまたバスの窓枠に掴まって下へ潜り込む。

場所がわかってる分先ほどよりも進む速度は早い。片手でバスに掴まりながら７つ道具で二度目の解体作業を急ぐ。

「っ！？……ち、今のでか？……」

７つ道具を持っていた腕が自分の言うことを聞かず、小刻みに震えているのを見て舌打ちする。

痛みがないせいで気付かなかったが、これはどうやら、折れていないにしろ腕にヒビか何かが入ったようだ。

「ふん、腕の一つや二つ、……バスジャック解決後の、バス内の女の子達とのイベントがの為ならば……惜しくはない！」

「トウジ！トンネルを抜けるぞ！」

「マジか！？……」

もうトンネルを抜けるほどの時間がたったなんて…まだ半分も作業が進んでねぇのに！

ザーザーザー……――――。

バスはトンネルを抜け、橋にささしかかった。雨音が聞こえる……
…たく、本当に雨の日は嫌な事しかねぇな。

カチャ…カチャカチャ…パキィッ…

「うッし！キンジ！速度制限式の装置は終わらせた！減速し……――るなっ！減速するな！」

「ど、どっちなんだよトウジ！」

「減速するな！時限式になった途端、時間が短縮されやがった！」

そう、速度制限式の装置を解除した途端、三分以上あった時限式の装置が、残り……３０秒になったのだ。

「ち…く、しょうッッ！！……最後はやっぱ力押しかよぉっ…！！」

もう爆弾解体など間に合わないレベルだ。そう、解体など出来はしない。故に力技。

爆弾をバスから引き離す。

「う、うおおおぉぉぉッ！！！」

両手で爆弾の設置『箇所』を引っ張る。無理矢理引っ張りながらも、

衝撃を与えないように細心の注意を払う。

…１１…１０…９……――――。

間に…合うか！？

バキバキと音を立てながら爆弾を引き剥がし、俺は爆弾を『抱え』ながらまたバスから落ちて転がり回る。

「こんちくしょう！！」

視界の端に一瞬、遠くにあり小さく見えたが、車輌科のヘリが見えた。

俺はそのヘリがある方向へ、転がりながらセムテックスを投げ捨てた。

パァンッ！……――。

一発の銃声が、雨音の中混じれて聞こえた。

次の瞬間、光と熱と、衝撃波が俺を襲う。

ドガアアアァァンッ！！！！…――――

空中で狙撃され爆発したセムテックス。俺はその衝撃を真っ向から受け、

「うそだろおおぉぉッ！！？」

橋の上から転げ落ち、海へ落下した。

海から引き揚げられたのはそれから３０分後。警察やら何やらが引き揚げた俺に海藻やら魚やらが沢山巻き付いていて、土左衛門かと思われたらしい。

勿論、それを見ていたバス内にいた女生徒達からは気持ち悪いだの不気味だのいろいろ言われた。
ちくせう、命張ったのにこんな結末って……やっぱり、雨の日にはろくな事がない。

トウジが、雨天時の事件には二度と関わらないと強く心に決めた瞬間だった。

◇

結論から言えば、バスジャック事件は無事解決。負傷者は二人だけ、それも軽傷と、バス一つ軽く吹き飛ばすくらいのプラスチック爆弾が仕掛けられていた割にはよい結果で事件は幕を閉じた。

だが、これはバスジャック事件。『武偵殺し』が起こした事件の一つが終わったに過ぎない。

そう、『武偵殺し』はいまだに捕まっていないのだ。

◇

事件翌日、俺はバスジャックでも使われていた『武偵殺し』が使っていたサブマシンガンを装備科（アムド）のミハエラに渡していた。

「ミハエラ、何かわかったか？」

「う～ん……なんの変鉄もないまっさらなＵＺＩッス。そういや最近仕入れ先からＵＺＩがたしか……１６挺だがパクられたって聞いた覚えが……」

「ビンゴ、当たりだミハエラ。キンジと俺が最初に潰したのが８、バスジャック時に潰したのが、神埼が一に俺が七。ピッたしだ。仕入れ先の情報教えて貰えないか？」

「おｋッス。にしても先輩が自ら足使って犯人追うの珍しいッスね。なんかあったんスか？」

ミハエラは机に広げていた、解体（バラ）したＵＺＩを退け、適当な紙を破りそこにさらさらと文字を書いた。

「……まぁ、な。」

「……京子さん…ッスか？」

紙を受け取ろうとした時、ミハエラは瓶底眼鏡を外し、その綺麗な目で俺を見上げて来た。

爆弾解体講座、無理矢理編（後書き）

今回、プラスチック爆弾は『セムテックス』にしました。

極小、高威力のセムテックスはマジで凄いッス。

そして出ました、皆大好きＰ９０！正式にはＰＤＷ（Ｐｅｒｓｏｎａｌ・Ｄｅｆｅｎｃｅ・Ｗｅａｐｏｎ）と言われるカテゴライズの銃です。

使用する弾丸が一風変わった銃でした～。

ではまた次回。感想御待ちしてま～す

狙撃の心

バズンッ！……カシャッ……カランカランッ……――。

装填、発砲、排莢。一連の動作を一回一回行いながら、トウジは人形（ガタ）の的をスナイパーライフルで貫いていた。

「……ふぅ…」

計１０発の射撃は頭部、そして胸部の中心の二ヶ所だけを貫いていた。

各５発づつその全てを二つの穴に放ったのだ。

寸分の狂いなく。

「……」

しかし彼の顔には喜びや、そう言った表情は浮かんでいなかった。

それもそのはず、彼にとって３００m先の標的を射抜く程度は『必然』だ。

なら彼の表情に浮かんでるのは何か？

「ちっ……」

彼はスナイパーライフルのマガジンを取り換え、再び装填（リロード）した。

このボルトアクション銃の名は『Ｌ９６』。彼はいつも、心を宥める時に狙撃銃を撃っていた。

◇

「えぇ、ありがとうございました。では失礼します」

ピッ……。

やはり足を残してないか。ＵＺＩを盗まれたと言う業者へ電話をかけて見たのだが、盗まれたのを無くなってから気付いたらしく犯人に繋がるものは何一つ得られなかった。

「ま、そんな簡単にゃいかねぇか」

俺は小さく溜め息をつき、空が緋色に染まるのを見ながら病院へ向

かい歩き出す。

今回の事件の負傷者、その一人……神埼・H・アリアへの面会と足取り無しと言う報告をするためだ。

もしかしたら探偵科（インケスタ）の連中が見つけたかも知れんしな。

病院までの道のりで、なにか土産物を買っていこうと思っていたら、視界の先にキンジが歩いてくるのが見えた。

キンジが歩いて来たのは病院の方向からだ。神埼に聞くより、キンジに『武偵殺し』の事を聞こうか。探偵科（インケスタ）に頼んでいたのはキンジだしな。

「よ、キンジ。神埼と会って来たのか？」

「トウジ……ああ、会って来た」

キンジは苦虫を噛んだように顔をしかめた。

どうやら、何か言い合ったみたいだな。神埼と。

「武偵殺しの事については、なんかわかったのか？」

「いや、……何も掴めてない。『武偵殺し』が使っていたホテルが

見つかったんだが、宿泊記録も外部から改竄されていて、部屋も鑑識科のやつらに調べてもらったが、犯人像に繋がるような痕跡は、全く見つからなかった」

「そうか……」

「トウジはどうだった？」

「ま、おんなじ結果だな。『武偵殺し』ってのは桁違いに狡猾な奴だな」

「……」

「……」

言葉が止まる。夕暮れ時に差し掛かった街並みは、買い物客や学生らが多く見え、俺たちはその喧騒の中、ただただ黙って立っていた。

切り出したのは、キンジだった。

「トウジ……一つ、聞いても良いか？」

「答えられる事なら、な」

「……『武偵殺し』と、なんかあったのか？」

脳裏に浮かんだのは雨。昔、俺が強くあろうと心に決めたあの日。

「どうしてそう思う？」

内心の動揺を悟られぬよう、平静を装いながら問い返す。

「……『武偵殺し』の言葉に、何度か反応してたから……かな。屋上の時も、バスジャックの時もだ。もしかしたら、と思って『武偵殺し』って単語（ワード）を使ったら、来てくれたろ？」

嗚呼、どうやらバレてるらしい。

「……キンジ、……すまんがこれはダメだ。まだ、言えない」

「どうしてもか？」

「ああ、……まだな」

「そうか」

「すまん…」

「気にするなって」

キンジはそう言って、軽く手を振りながら帰っていった。

◇

バズンッ！……カシャッ…カランカラン……――――。

無心になろうと思いながらも、思い浮かぶ女性の顔。ミハエラとキンジとの会話で思い出してしまった女性。俺の命の……――いや、俺という存在の恩人。

「クソッ……何で当たるんだよ」

普通、こんな雑念を抱きながら狙撃をしても狙った場所には当たらないものだ。

だがしかし、この程度の距離なら『必然』として弾が当たる。

意図的に外そうと思わない限り、彼は当ててしまうのだ。

普通ではない。普通では出来ない。

まだ外れてくれたなら苛立ちも収まっていたのかもしれない。

だが、彼は無意識に当ててしまう。

苛立って、取り乱して、他の事を考えていても、当ててしまう。

こんな人常ならざる自分が、今は嫌だった。

パァンッ！……――――。

隣から発砲音が聞こえた。見てみると、ヘッドフォンを付けた小柄な少女がドラグノフ狙撃銃を構えていた。

「……」

無口な少女はスコープを覗きながら次弾を放った。

パァンッ……――。

狙撃科の訓練施設の射撃場。ここなら彼女が来ることになんの不思議もない。彼女は狙撃科のエースだからだ。

だから、彼女の長いまつげを盗み見て、トウジも次弾を放つ。

バズンッ！……――。

パァンッ！……――。

バズンッ！……――。

パァンッ！……――。

…………――――――。

「…………」

「…………」

あれからなん発撃ったのだろうか。時間の感覚があやふやになっていたのに気づき、俺は腕時計を見て驚いた。

「うわ、もう夜の九時か」

仕方ない、片付けて帰ろうか、と思ってライフルを片付けようとしたその時。

「……集中…出来ましたか？」

酷く棒読みな彼女の言葉に俺は苦笑してしまった。

「ああ、集中できたよ。ありがとうレキちゃん。お粗末な腕でごめんね」

「……いえ」

どうやら、半分自棄（ヤケ）になりながら撃っていた俺を見かねて彼女は隣に居てくれたらしい。

確かに、彼女が隣に来てから自然と焦燥感のようなものは失せ、ほぼ無心になって撃てていた。

「レキちゃんはまだいるのかい？それとも帰る？」

「……はい。帰ります」

「そっか……送ってくよ。それと、よかったらご飯でも一緒にどう？お礼がしたいんだが……」

「……風が……。わかりました」

彼女は小さく呟いき、ドラグノフ狙撃銃をギターケースに入れて小さくコクンと頷いた。

狙撃の心　（後書き）

トウジ、レキたんに癒されるの巻き。

レキたん可愛いよレキたん。（笑）

Ｌ９６狙撃銃。

英陸軍（イギリス）の正式採用銃。

ボルトアクションが痺れる渋い狙撃銃です。

個人的に狙撃銃の中で一番好きかもです。

ではまた次回。感想お待ちしてます♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6450x/

緋弾のアリア　～最強のフツメン男～

2011年10月21日07時00分発行